三階の魔女

山崎洋子

講談社

山崎洋子

講談社

三階の魔女
1989年12月13日　第1刷発行

著　者　山崎洋子
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二―〇一
電話　東京（〇三）九四五―一　一一（大代表）
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一一〇〇円（本体一〇六八円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
© Yoko Yamazaki 1989 Printed in Japan

ISBN4-06-204653-9　（文2）

目　次

ラブレター　7
いきなりハードボイルド　45
赤いお月さま（ルナ・ロッサ）　81
六本木メランコリー　123
人形と暮らす女　159
三階の魔女　199

装画／落田洋子
装幀／安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

三階の魔女

ラブレター

「静かすぎる夜だから、手紙を書きたくなりました。お元気ですか、楽しく生きてますか？　このあいだ会ったばかりなのに、こんなふうに言うのは変かしら……。

あの日はほんとに素敵だった。あなたとあんなふうにお話しできるなんて、わたし、思ってもみませんでした。今夜はその思い出をとりだして眺めながら、一杯のワインに酔っています。

今度はいつ会えるのでしょう。こういうことは、期待すると望みがかなわないものだと聞きました。では偶然の機会を待ちましょうか。それとも密かに魔術でもかけましょうか。アブラカタブラ、早くその日がきますように……」

便箋からは、ほのかな香水が匂いたった。朽ち葉色の封筒には、裏に「M」とだけある。

誰だろう、と、青村は首をひねった。文面や文字から察するに、差出人が女性であることは間違いない。だが、あの日とはいつのことなのか。

「あなた」

背後から妻の道子が呼んだ。青村はあわてて、手紙をダイレクトメール類の間に挟み込んだ。

「こんな物が送られてきたの。どうしましょう」

道子は、赤絵のコーヒーカップを手にしている。

「なんだ、それがどうした」
「使ってもいいのかしら」
「どっかのメーカーが宣伝のために送ってきたんだろ、使うなり捨てるなり、勝手にしたらいい」
「捨てるなんて……ただあなたのお仕事筋から送って来たものを、わたしが勝手にどうかしちゃいけないと思って」
仕事がら、青村のところへは、小物などのサービス品がよく送られてくる。どうでもいいような物ばかりだから、道子もいちいち報告したりしないのに、今日に限って、わざわざ青村の部屋へまで入ってきた。
「まだなにか用か」
コーヒーカップをいじりながら、道子は突っ立っている。
「あの……」
「なんだ」
「お手紙、どなたから?」
やっぱりこれに気づいていたのだ。
「全部、ダイレクトメールだ」
青村は短く答えた。道子はそれ以上しつこく聞く女ではない。聞いても無駄だということを、十年間の結婚生活で、青村が覚えさせた。
「出かける」
ぶっきらぼうにそう言い、青村は立ち上がった。道子は哀願するような眼を、彼に向けた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

「いい鯛が手に入ったの。今夜お刺身にでもしようと思ってたのよ。夕飯までには帰ってきてくださる？」

「さあ、わからないね、デザイナー連中と会うし、彼等と食事でもして話を聞くのも、仕事のうちだから」

もちろん嘘だった。あの手紙を、ゆっくり見たいだけだ。青村はマンションの駐車場に降り、愛車のBMWに乗り込んだ。ハンドルに腕をかけ、スラックスのポケットからあの手紙を取り出した。

青村の勤務先は大手デパートの企画宣伝部だ。職場の女子社員のほかに、デザイナー、イラストレイター、コピーライターといった、外部から来る女性と会う機会も多い。この手紙の主は、そういった仕事関係の相手かもしれない。

バーやスナックの女の子ということも考えられる。しかし彼女たちは、男女関係のプロだ。こんな思わせぶりな手紙を、客の自宅宛に送ってきたりするだろうか。

青村は、もう一度便箋を開いた。そこに封じ込められた香水は、神秘的なオリエンタル調だった。字の美しさとあいまって、大人の女を感じさせる。

あの日……とても楽しかった……あなたとあんなふうにお話しできるなんて……。M……M……。

ああっ、と青村は小さく叫んだ。美奈子だ、桜井美奈子だ。なるほど、彼女ならこういう大胆なことをやりかねない。

あれは二週間ほど前のことだった。高校時代のクラス会が、十年ぶりに行われた。四十を目前にして、みんな、いいおじさん、おばさんになっていた。やはり年をとった、すすぼけてきた、

という感じはいなめない。
しかも付き合って得をするような人間は、一人もいなかった。男は二流、三流企業が多かったし、女は所帯じみた主婦ばかりだった。
だがそんな中で、美奈子だけは異色だった。長いまっすぐな髪、黒いレースのドレス、垢ぬけた化粧と身ごなしなどが、ひとり別世界から来たかのように、目立っていた。
男たちの注目を一身に集め、そのぶん女たちからは微妙に浮き上がっていたといえる。高校時代はいるのかいないのかわからないような少女だっただけに、その変わりようは鮮やかだった。
二次会のパブで、青村は彼女とカラオケを歌った。終わって席に戻る時、美奈子がそっと名刺をくれて囁いた。
「青村さん、新宿のTデパートに勤めてるんですってね、あたし神宮前でブティックをやってるの。遊びに来てね」
美奈子は男たちの誰にも、平等に愛想良くしていたから、その時はほんの社交辞令だ、くらいに聞き流していたのだが……。
席が離れていたからあまり話すことはできなかったが、青村は彼女にとって、他の男たちより印象的だったのかもしれない。Tデパートはなんといっても一流企業だし、青村はそこの企画宣伝部係長だ。
吊るしの背広を着ている男たちの中で、彼だけは、セルッティのブレザーにダンヒルのスラックスだった。ブティックを経営しているというからには、そのあたりも見抜いていたのだろう。
青村は軽い興奮を覚えた。ここから神宮前まで、車なら一時間とかからない。手紙を受け取ったその日に行くというのも考えものだが、どんな店か、外から見るくらいならいいだろう。

自分で自分に言い訳をして、車を出した。それにしても、手紙の着いたのが今日でよかった。道子はうるさい妻ではないが、最近、妙に物問いたげな眼で青村を見ることがある。なん回もあった彼の浮気に、気づいていたのかもしれない。

まあ、そうだったとしても、どうこう騒ぐことのできる女ではないが。

ブティック『プアゾン』は、静かな住宅街にあった。普通の家の駐車場だったところを、小さな店に改造したもののようだ。ドアと壁は黒、窓枠はワインレッド、ベージュ色のカーテンがかかった飾り窓からは、黒いドレスの人形が、物憂げな表情で外を見ている。プアゾン（毒）という店名にふさわしい外観だった。

今日は通り過ぎるだけ、と思っていたのだが、見ている眼の前でパッとドアが開き、当の美奈子が出てきてしまった。着ているのは胸元がVの字型に大きく開いた、ココア色のシルクドレスだ。

「あら！」

車の中の青村を見つけ、美奈子が一瞬棒立ちになった。それから、子供のように車に駆け寄り、

「信じられない！　こんなに早く来てくださるなんて」

青村は少なからずあわてたが、こうなったら逃げるのもおかしい。

「こんにちは。ちょうど通り掛かったら聞いたことのある店名が眼についたもんで」

あまり気のきいたせりふじゃないな、と、言ってしまってから思った。美奈子は感嘆したように車を眺め、いたずらっぽく囁いた。

「あれ、見てくださった？」

やっぱり彼女だった。安心すると同時に、青村の胸は少年のように騒いだ。

「見たよ。ありがとう」

「よくあたしだってわかったわねえ」
切れ長の眼を、美奈子は大きく見ひらいた。
「ご迷惑だったかしら」
「まさか、嬉しかったよ」
「じゃ、中へ入って」
赤いマニキュアの手を車窓から差し込み、美奈子は青村の腕をそっと叩いた。
ブアゾンは五坪ほどの店だった。インテリアは外観同様、黒とワインレッドに統一され、手編みのセーター、アクセサリー、インテリア小物、陶器などが、センス良く並べられている。どれもいい値段だ。このあたりだと客筋もいいから、こういう物のほうが、かえって売れるのだろう。
「いい店だね」
本心から青村は言った。
「でしょ？　青村くんならわかってくれると思ったわ」
そう言ってから、美奈子は頭をのけぞらせて笑った。
「青村くんっていうのはおかしいわね、もう高校生じゃないんだから」
「いやあ、何年ぶりでも、会うととたんに昔返りするところが、同級生のいいところだよ」
勧められた籐の椅子に青村は腰掛けた。
従業員らしい姿はない。美奈子がひとりでやっている様子だ。
「ねえ知ってる？　青村さんと話をしたのって、このあいだが初めてなのよ。一年間同じクラスだったのに」

ロイヤルコペンハーゲンのカップにコーヒーをいれて、美奈子は差し出した。
「嘘だろ？」
「あらほんとよ。用事で口をきいたことくらいはあったけど」
「だとすれば恥ずかしかったんだろう。君みたいにきれいな人と口をきくのが」
「まあ、お上手」
籐椅子の背もたれに手をかけ、美奈子は背後から青村の顔を覗き込んだ。香水が匂った。便箋についていたものより、甘い香りだった。
「いまつけてる香水、あれとは……」
青村が言いかけると、美奈子がくすっと笑った。
「よく気が付いてくだすったわね。さすが青村さんだわ。そう、あれとは違うの。色々持って て、その日の気分で変えるのよ」
「だけど驚いたな」
苦笑混じりに呟くと、美奈子がすぐに聞き咎めた。
「なにが？」
「いや、あれの着いたのが、もし今日じゃなかったら、と思って」
「だって今日着くようにしたんですもん。青村さん、新宿のTデパートにお勤めなんでしょ、だから、今日は定休日でお休み」
なるほど、そうだったのか。美奈子は、ちゃんと計算に入れていたのだ。青村自身が、その手紙を受け取ることを。
「ね、こんなことを言うとなんだけど、あのクラス会、あなたとあたしだけが浮き上がってたよ

うな気がしない？」
アンティックな椅子を引き寄せて、青村の隣に座り、美奈子は内緒話をするように声をひそめた。
「というと？」
「だってほら、あたし以外の女性は、みんな幸せそうな奥さんだったじゃない」
「君は奥さんじゃないの？　こんないい店を出してるんだから、さぞかし立派な御主人がいらっしゃるんだと思ったけど」
「残念、一度はいたんだけど、今は女ひとり、あくせく頑張らなきゃいけない身の上なの」
冗談めかした口調で、美奈子は答えた。離婚したということは、その時の財産分与か慰謝料でも、この店を手に入れたのだろうか。いずれにしても、悪くない独身生活のようだ。
「君は確かに、ほかの女性たちとは違ってたよ。現役の女っていう感じだった」
青村がそういうと、美奈子はまたのけぞって笑った。白い喉が、ひどく色っぽい。
「だけど僕が浮き上がってたっていうのはどういうこと？」
「だって、ほかの男の人たちみたいにしょぼくれてなかったもの」
「しょぼくれてるよ、僕だってしがないサラリーマンだからね」
「いいえ、着るもののセンスから身のこなしまで、とてもリッチな感じだった。身に付いた優雅さっていうのかしら……」
美奈子は真面目な顔で、青村の聞きたかった通りのことを言ってくれた。
確かに青村くらいの年齢は、男が経済的に一番苦しい時だ。会社での地位はいまいちのところだし、子供の教育費だ、家のローンだと金はかかる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com